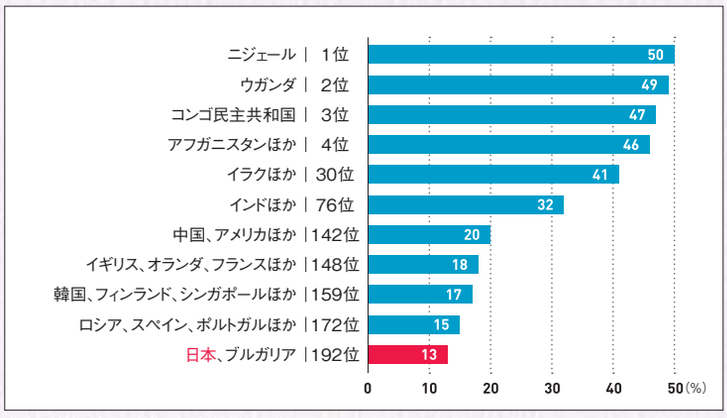
子どもを支える仕事 Chapter. 1

データとキーワードから現代の子どもを浮き彫りに
日本の子どもたちは今

子どもの人数や生活状況、健康状態、犯罪関与などにまつわるデータから日本の子どもたちが置かれた状況を明らかにします。さらに著名な児童精神科医と臨床心理士が「キーワード」を用いて現代の子どもを語ります。

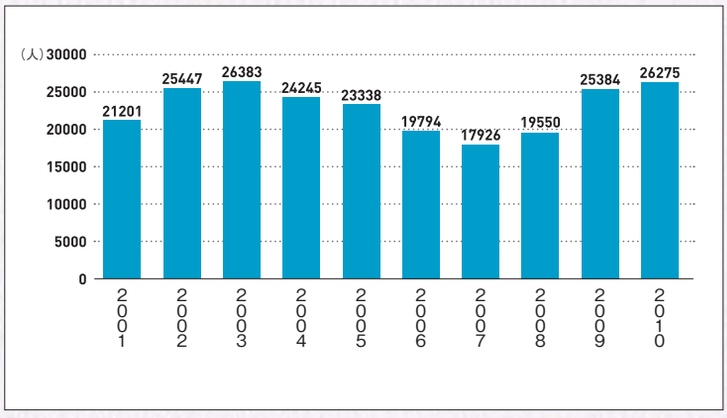
取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

図1　15歳以下の人口の割合



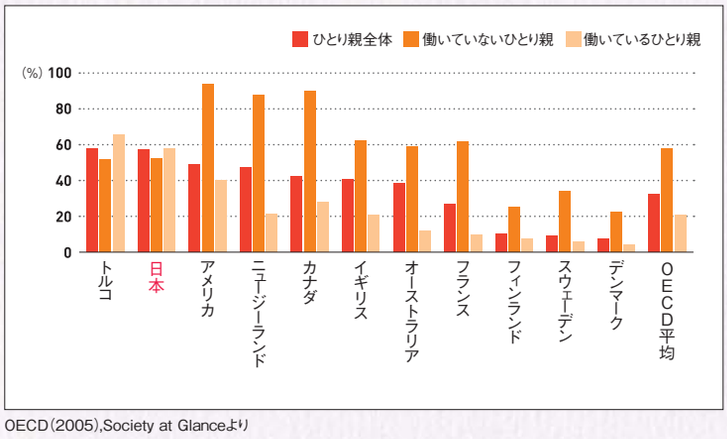
世界保健機関（WHO）世界保健統計（2010）

図2　待機児童数の推移



子ども・若者白書（2010）内閣府

図3　ひとり親家庭の貧困率



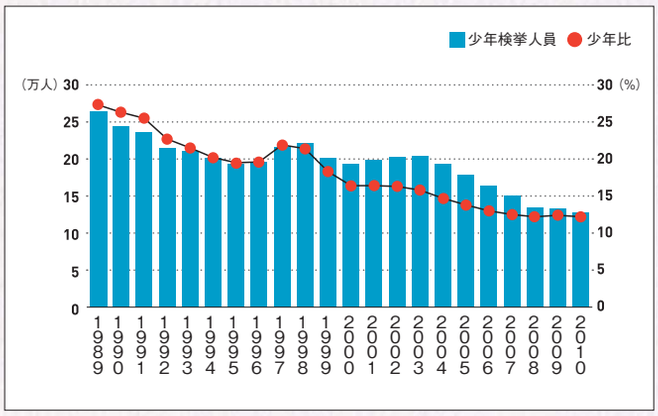
OECD（2005），Society at Glanceより

日本は「少子化社会」と言われているが、図1にそれがはっきりと表れている。15歳以下の人口は、WHO加盟193カ国中最下位の13％である。ちなみに60歳以上の人口は29％で、こちらは世界1位。日本はまさに「世界一の少子高齢社会」である。

子どもが少ないにもかかわらず、保育園に入れない子どもは増えている（図2）。いわゆる「待機児童」問題だ。その解消も目指し、幼稚園と保育園の統合（幼保一体化）などを盛り込んだ新システムの2015年からの実施が政府で検討されている。

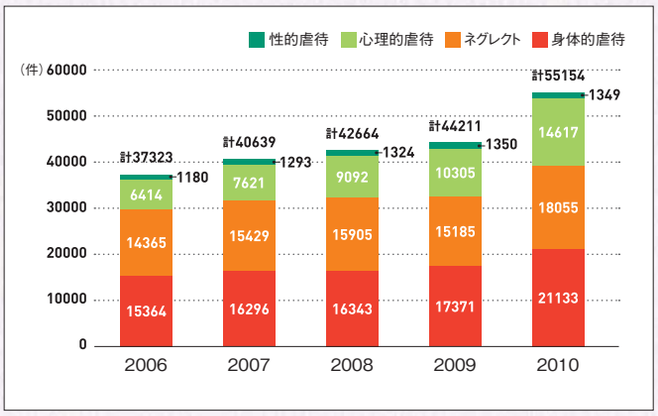
この「豊かな国」日本には、かつて「貧困」は存在しないと言われた。しかし現実は違う。子どもの貧困率は高く、特に「ひとり親家庭の貧困率」は先進国中1位、OECD全体でもトルコに次いで2位（図3）。図中に「働いていないひとり親」と「働いているひとり親」の貧困率が示されているが、ほとんどの国が前者の比率が高いが、日本とトルコだけは後者が高い。つまり働いても貧しい、「ワーキング・プア」状態の家庭が多いのだ。貧困は児童虐待につながり得る。10年の対応件数は5万5154件（図4）。10年の値は東日本大震災

図7　少年の刑法犯



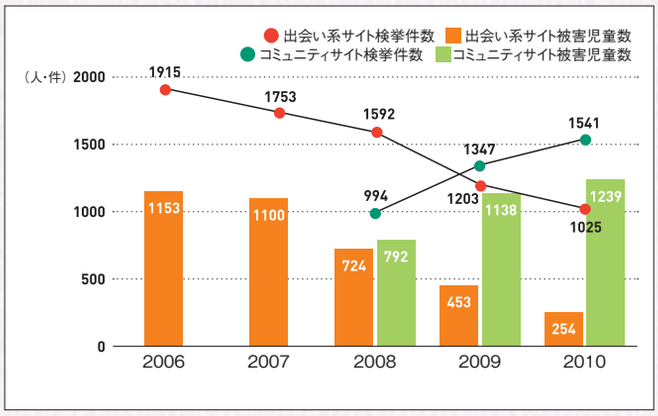
犯罪白書（2011）法務省

図4　児童虐待の相談種別対応件数



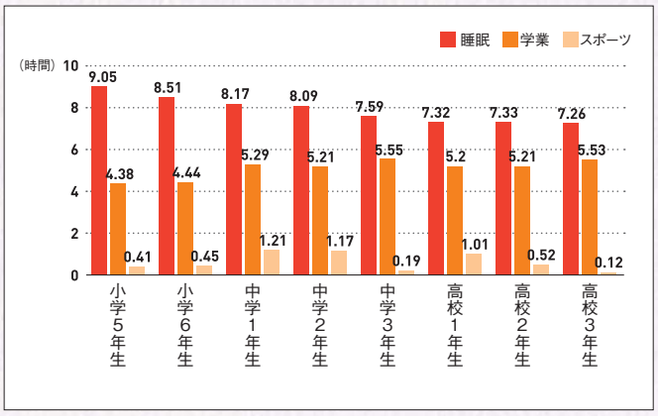
厚生労働省（2010）

図8　出会い系サイト・コミュニティサイトに起因する被害・検挙



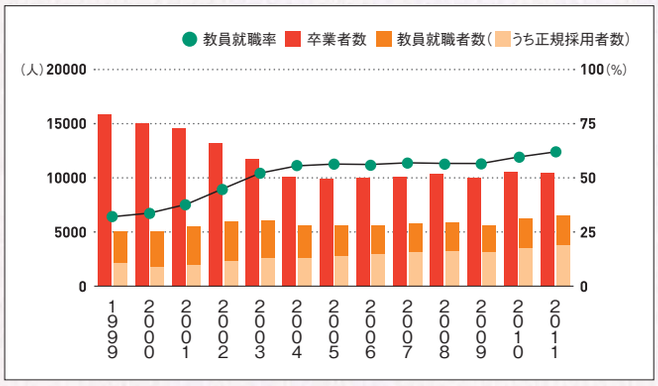
警察庁（2011）

図5　子どもたちの生活時間



社会生活基本調査（2006）総務省

図9　国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）卒業者の教員就職状況



文部科学省（2011）

図6　「からだのおかしさ」の実感ワースト5（高校）

	1位	2位	3位	4位	5位
1978	腰痛	背中ぐにゃ／朝礼でパタン		首、肩のこり／貧血	
1990	アレルギー	すぐ「疲れた」という	腹痛・頭痛を訴える	視力が低い	腰痛
1995	アレルギー	腰痛	腹痛・頭痛を訴える	すぐ「疲れた」という	首、肩のこり
2000	アレルギー	すぐ「疲れた」という	腹痛・頭痛を訴える	腰痛	不登校
2005	アレルギー	腰痛	平熱36度未満／腹痛・頭痛を訴える		すぐ「疲れた」という
2010	首、肩のこり	うつ的傾向	アレルギー	夜、眠れない	腰痛、すぐ「疲れた」という

子どものからだと心白書（2011）

高校生は「首、肩のこり」「うつ的傾向」が増加

の影響で宮城県、福島県が除かれており、ここ数年の増加は著しい。

生活をみると、睡眠時間は年齢差があり、小学5年生は平均9.1時間、高校3年生は7.3時間（図5）。学業時間（授業やそれに関連する学習活動）は、中学と高校であまり差はなく、最大は中学3年生。子どものからだの変調について学校教員の実感を尋ねた調査がある（図6）。高校の先生の回答では、これまで上位だった「アレルギー」などに加え、「首、肩のこり」「うつ的傾向」「夜、眠れない」が上位に入ったのが気になる。

犯罪という点では、日本は世界で最も少年の犯罪率が低い国のひとつである。少子化の影響もあるが、検挙者中の少年の数や比率は年々減少している（図7）。とはいえ楽観はできないし、誰しも犯罪に巻き込まれる可能性はある。コミュニティサイトなどを介して被害を受けるケースは増えている（図8）。注意が必要だ。

こうした現代の子どもたちを支える学校の先生たち。このところ就職率は上がっているが、子どもがさらに減れば状況は変わるだろう（図9）。

子どもを理解するキーワード1

自尊感情が低い日本の子どもたち

私は子どもの心や行動面の問題と自尊感情（セルフ・エスティーム）の関連について、小児医療の現場で、また教育者、研究者として経験を積んできました。その一環として10年ほど前からドイツの研究者が開発したQOL尺度評価（8～12歳と13～16歳用）を用いた子どもの自尊感情の調査を行っています。

全国の小学生（4973人）、中学生（2969人）を対象にした調査結果が**図10**。小学校2年生から中学3年生まで学年が上がるごとに自尊感情が下がっているのが一目瞭然です。男女別では女子が低く、また学校間、クラス間の差は多少あるものの地域差はみられませんでした。

思春期にはどの国の子どもも自尊感情は下がる傾向にありますが、日本の場合、このように下げ止まらないのが大きな特徴です。この尺度は高校生や大学生は対象としていませんが、試しに調べてみたところ、同様に自尊感情が低いことがわかりました。このように低い状態のままで就職や結婚、子育てに向かうとしたら心配です。

同じ調査をオランダの子どもたちで行い、それと比較したものが**図11**。日本の子どもが明らかに低いことがわかります。今後はアジア各国とも比較したいと考えています。

自分が相手にされない授業が自尊感情を下げる

自尊感情が「低い」とはどういうことでしょうか。「高い」子どもは情緒が安定し、責任感がある、社会的適応能力が高い、学習意欲が高いなどの特徴があると言われています。さらに重要なのは、逆境に強いこと。いじめに屈することが少なく、他人の目を気にしない、失敗に動じないなどと言われます。自尊感情の「低い」子どもたちは、これらの逆であると考えればよいでしょう。

では、なぜ日本の子どもたちはこれほどまでに自尊感情が低いのか。私は第一に、親自身が高くないということではないかと思っています。親が自分の生き方に自信がなく、将来に不安を感じるなか、社会から受けるプレッシャーをそのまま子どもたちにぶつけてしまっているような状況があるのではないでしょうか。

学校の問題もあるでしょう。日本の学校はまだまだ一斉授業中心ですので、ついていけない子どもには厳しい。毎日毎日自分が相手にされない授業を受けていると、自分は取るに足りない存在であると思うようになります。これでは自尊感情を下げるために毎日学校に行っているようなもの。そうした子どもがいるということを、大人たちは認識しなければならないでしょう（談）。

青山学院大学
教育人間科学部教授
児童精神科医
古荘純一氏

図10　自尊感情とQOL得点の平均値（小学生、中学生）

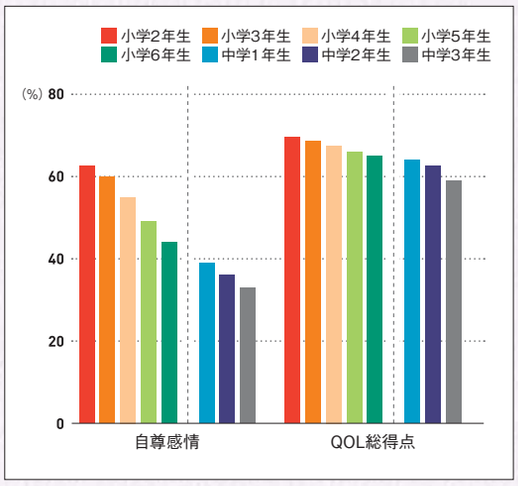


図11　自尊感情とQOL得点の平均値（日本、オランダの比較）

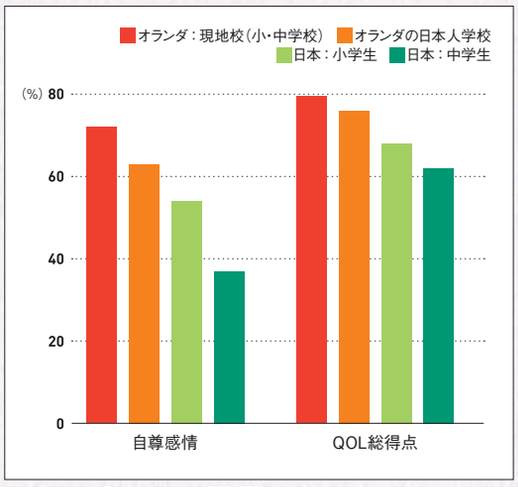


図10、図11とも『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』（古荘純一著／光文社新書。著者の承諾を得て一部改編）

子どもを理解するキーワード2

思春期はどう変わったか

「悩まない子」たちに先生方は悩んでいる

学校のカウンセリングルームのような場所は、これまでは何かに「悩んでいる子」がやってくるものでした。ところが最近は、「悩まない子」をどうしたらいいのかと先生方が苦悩しておられることが増えています。

例えば不登校の場合、かつては一見平気そうに振る舞っていても、実はさまざまな悩みを抱えているのが一般的でした。でも今は、周囲は困っていても、本人は「何を悩めばいいのかわからない」ことも珍しくありません。問題行動の場合でも、これまでは叱れば落ち込んだり、改めるのが普通だったのが、よくわからない反応をする。現場を押さえられているのに「証拠がないじゃないか」と逆ギレしたり、「先生、どうしてそんなに偉そうなんですか？」と妙な切り返しをしたり。いわゆる反抗とも何かニュアンスが違うそんな子たちをどう理解していいのかわからず、何とか話を聞き出してほしいとカウンセリングルームに紹介されることも増えてきています。

「大人なんて信用できない…」と不信感丸出しの子には逆にそのひっかかりからつながりようがあります。ところが「話すことも話したいことも何もない」「それってどんなものなの？」とゼロから尋ねても答えてくれません。「知らないならいいです」と、ほとんどの子が会話を止めます。彼らは好きなジャンルについてはネット上に気心の知れた友人がいることが多いので、わざわざ説明してまでリアルな世界の人間とかかわりたいとは思わないのです。

だから私は日頃から中高生が好きそうなジャンルをチェックし、できるだけ多くの引き出しをもつように努力しています。

そうして細かく、細かく尋ねていって、子どもが少しでも顔を上げる話題があったら、そこから会話を広げていく。経験上、その子の本質的な問題から遠いところからならつながれる可能性があると私は思っています。このような面談の50分間は、はっきり言って死にそうにクタクタになります（笑）。

「自分の机」がなくなり「人間関係」に依存

結局そういう子たちも言い知れぬ苦しみや混乱を抱えていることが次第にわかっていくのですが、私はその背後に社会の変化を感じています。ひとつは学校の枠組みです。

かつて学校といえば「自分の机」という定点がありました。けれど今は選択科目や教室移動が多く、「自分のロッカー」はあっても「自分の机」がないケースが増えています。すると休憩時間など「人間関係」だけが拠り所です。どこかのグループに入れなかったら教室に居場所がない、だから仲間外れにならないようにグループのメンバーに全力を挙げて取り入る。そういうことに疲れ切っている子たちがとても増えているように感じます。

かつて「自分の机」や「自分のクラス」の枠の縛りがきつかったころは、「こんな制限がなければ自由にできるのに…」と考えることができました。けれど今は誰のせいでもなく、すべて自分のせい。その点で今の学校生活は昔よりはるかにキツいのではないかと思います。

このところ「対人恐怖症」が減ってきたと言われています。実際、対人恐怖を訴える相談者は激減しています。一方で増えているのは一人ぼっちになる恐怖、「ぼっち恐怖」とも呼びたくなるような症

島根大学教育学部教授
臨床心理士・
スクールカウンセラー
岩宮恵子氏

状です。「対人恐怖」とは共同体の中で一人だけ目立つことを恐れる症状ですが、「ぼっち恐怖」は自分のグループからはみ出て一人になる恐怖。人数は違えど、集団から浮き上がることを必要以上に恐れるという点は共通します。かつてなら対人恐怖症になっていたような繊細な人が、今はぼっち恐怖に陥っているのではないかと私は見ています。

今の中高生は、一人ぼっちになることを本当に恐れています。大学に入れば変わるかと言えば、そうでもありません。「一人でいるところを見られたくないために、一人で授業に出ることができない」大学生は、実は驚くほどたくさんいます。

「自己責任」に苦しむ今どきの思春期

子どもたちに苦しみをもたらしているもうひとつの大きな変化は、家庭環境だと思います。

今の親御さんは、昔よりもものわかりが良くなりました。子どもの自主性を重んじ、子どもが幼いうちから何かと「あなたがしたいようにしなさい」と言います。そして「あなたが習い事をしたいと、あなたが塾に行きたいと言ったのよね」という言いまわしで時に子どもに選択のすべての責任を負わせるのです。

このことを心から喜べる子はめったにいません。ふつうの子は、自分が希望したことにされてしまった、背負い切れない責任を押しつけられたという、「濡れ衣感情」のようなものが湧いてきます。

「確かにしたいと言ったかもしれない…でもああ言わなければ怒るし…でもまあ自分を認めてくれているから今は我慢するか…けれどいつも私のせい…」というようなモヤモヤとした感情を抱え込み、誰に当たればいいのか、何に反抗すればいいのか訳がわからないままに、「先生、なぜそんなに偉そうなんですか？」などと口走ってしまったり…。何かそのような複雑なものが子どもたちの内面で煮え立っているのではないかと想像しています。

「思春期」という言葉を用いるならば、かつては周囲から「強制」されることと自分が望むことのギャップに苦しみ、葛藤するのが思春期のひとつの特徴であり、その結果として不登校なども生まれました。そうした子どもは今もいますが、ここ数年で圧倒的に増えているのは、「自由」や「自己責任」といったムードが子どもたちの周囲に蔓延するなか、どうしていいかわからずに不登校になる子どもたちです。相談者がどちらのタイプなのかを見分けるのがとても重要であると、私はここ5～6年で痛感するようになりました。

前者の子ならば、通信制の高校や高校卒業認定取得など、自由度の高い進路を勧めることでその子が生きやすくなり、個性が花開くことも期待できます。しかし後者の場合、自由度を高めるような方向だとさらなる迷路に迷い込む危険性が出てきてしまいます。

「否定」を訓練できる進路指導を行いたい

人の発達段階のなかで「否定」が重要な時期があります。幼い子どもが自分の意志をもちはじめるとき、「イヤ」「ヤダ」など、それまで一体化していた親との世界を否定するところから始まります。主体ができるためには、他と区別していく意味で、否定を繰り返す作業が必要になるのです。

先の後者のような子は、そのトレーニングが十分になされる前に「自己責任」の世界に投げ出され、路頭に迷ってしまったと考えられます。そんな子たちには、学校の進路指導の場面においても、否定させてあげるところからスタートしていただきたいのです。

先生が「この進路はどう？」と提示するのに、生徒が「それはイヤ」「違う」とことごとく否定することがあります。そんな子と向かい合っているとだんだんイヤになってくると思いますが、我慢して「どこが違う感じなの？」「じゃあこれは？」と何度も問い返してください。

こんなやりとりを経てからでなければ、やりたいことを見出す力が出てこない子も存在するのです。そう考えて、可能な限りのエネルギーを費やして本気でその子に向かっていただきたいのです。

本来、これは親が中心になってやるべきことですが、「親の勧めた進路で失敗した」と言われることを極端に恐れてかかわれない親も増えています。

そんな不安定な環境にいる子どもたちや不安な保護者を支えるためにも、先生方や私たちスクールカウンセラーが今後もいっそう緊密に連携をとっていく必要があると思っています（談）。

『フツーの子の思春期～心理療法の現場から』
（岩波書店）

「ふつう」の子が入っていく思春期の迷宮と、今どきの「フツー」の子の迷宮は、似ているけれど何かが違う。その構造をじっくり解き明かしていく力作。また、『家族みんなで思春期』（岩波書店）が秋に刊行予定